

昭和二十七年七月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

（通第四十号）

慈光

第四卷・第七號

目

次

親鸞におきては

ただ念仏して

花田正夫（1）

無碍の一道

福島政雄（3）

自己の正体を見る

中野駿太郎（7）

親鸞におきては

ただ念佛して

花 田 正 夫

聖人の御晩年のことである。京洛隠棲の寓居をたづねて、関東の念佛者達が、当時乱世のこととして身の危険をおかし、はるばる十餘箇国の境をこえて聖人にお会い申した。それには種々な原因がある。関東の念佛者の中におこつた異義の数々、律法と放縱、一念義と多念義、善鸞の異説等である更に外部からの念佛謗難の声、鎌倉における法難等であらうともかくも内と外に吹きすさぶ嵐の中にあつて、愈々聖人敬慕の情にかられて、極く僅かであるが真劍な念佛者数人がはるばると足をほこんだのである。

聖人の仮寓を探しあて、老聖人の温顔に接し得た念佛者の感激も眼前に彷彿と浮んで来る。旅路の塵を払ひ、手足を洗ふのもそこをこにして、聖人を中心にして車座にならび、一応の御挨拶を終ると、同行方の胸にわだかまる不審の数々を言上した。老聖人は念佛の中に夫々の申し出を一つ一つ靜かにうなづきうなづき聞きとつていかれた。そして思ふことの大方を語り終へた念佛者の口が次から次と閉ざされて、聖人の御指南を待つた。その目付その対度に一語をも聞きもらす

まいとする眞劍な空氣があたりにただよつたことであらう。今生の再会を二度と期し難い一期一会の場面である。しばらく念佛を続けられた聖人の御口がやをら開いて

おのおの十餘箇国の境を越えて、身命を顧みずして尋ね来らしめたまふ御ころぞし、ひとへに往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり。

聖人は先づ遠く聞法する人々の勞をねぎらはれると共に、そのめあてを「ひとへに往生極樂の道を問ひきかんがため」と御指適なされた。憶ふに聖人は「如来世に興出したまふ所には、ただ彌陀の本願海を説かんとなり」と正信偈に述べられてゐる。釈迦如来の出世の本意が、ただ彌陀佛の本願海を説かれる一つにあつた。親は子に必要なもののために腐心する。釈迦佛も亦、人生にどうしてもなくつてはならぬ、しかもそれ一つで満足する、それはただ彌陀佛の本願にあることを知らせて下さる、そしてそれを出世の本懐とせられてゐる

も知りたるらんとこころにくく思召して在しましてはんべらんは、大きな誤なり、もし然らば、南都・北嶺にもゆゆしき学生達多く座せられて候ふなればかの人々にも会ひたてまつりて往生の要よくよく聞かるべきなり。

してみれば、内外の思想の嵐にさらされた者も、彌陀の本願のまことを聞きひらくことによつて、一切の問題がおのづと解けて無碍の一通がひらかれて来る。「ひとへに往生極樂の道を問ひきかんがため」との聖人の御指南は、現代のあらゆる思想の嵐の中に処する私共への唯一無二の指針である、人生問題の根本的解決が信仰問題にあるといふことを教へられる。人生問題をのけにした信仰問題は画紙の無いところ、絵を画くと同様である、人生問題といふ画紙に信仰の絵があらはれて行く。釈迦佛を始めとして各高僧と呼ばれる方々も皆人生問題から出発して信仰問題においてその解決の曙光を見出されてゐる。このことは人生問題の渦中に彷徨する者に大きな灯炬を掲げて下さつてゐる。

又聖人の「たづね来らしめたまふ御ころぞし」と仰られる中に、御同朋御同行とかしづかれる聖人の徳風が自然に滲みでてゐるのを氣付かされる。ナザレの聖者は弟子の足を洗つたとき、善財童子の第五の知識良医彌迦は、久遠の求道魂を持つ童子を、高座から下りて合掌してゐる。師が弟子を拜み、師が弟子の足を洗ふ、その徳が「たまふおんころぞし」と仰られる言葉の中に尊く閃いてゐる、聖人滅後七百年温顔は寂滅の煙と化し、德音は無常の風にへだてられた今日、幸にも実語を残し給うてゐる。その実語をとほして圓光が四隣を照すに似て聖人の徳風が歴々然として浮び上つて来るではないか。

しかるに念佛より他に往生の道をも存知し、また法文等を

さて人生問題の歸結としての信仰問題について、念佛より他には道も法文も何も知らない、若しそれ以外のことを聞きたいのであれば奈良や叡山に立派な学者がおいでになるのだから、その方々にお会いして信仰問題のかなめを心ゆくまでおたづねなさいと仰られる。ここに學問と信仰との問題が明にされてゐる、即ち學問をすればする程難解の事柄が多くなり、そこに自己の愚昧さと無力さが知れて来る。さうしたことが知れば知れる程本願の広大なむねを仰ぎ、そこに如何にいやく愚かにつたない者も、本願一つでたすけられることを信知する、それが學問のかなめである。聖人はすでに愚禿の身に帰つて居られる。然しそれを他人に強制しようとはなさらない、御望みなら奈良や叡山の學者について心ゆくまで御尋ねなさいと述べられる。

私はかう言ふ聖人の御言葉の中に、飽くまでも凡夫往生の道を御身にかけて御知らせ下さることが非常に有難い。憶ふに善導大師の生涯かけての御仕事は、觀經に於いて救済された草提希夫人を実際の凡夫であり、夫人の往生した淨土は眞実の淨土であるといふことを心血を注いで明かにされたことにある。そして極惡最下の凡夫が、極善最上の淨土に往生出来るのは念佛の不可思議力によると定められ、大師自身も、

と現に罪惡生死の凡夫と仰せられつつ念佛の一法に歸入せられてゐる。聖人満九十年の御歩みは、この凡夫直入の道を味にしつくして下されたと渴仰する。

「われはこれ賀古の沙彌教信の定なり」とは晩年の聖人の御持言であつた。教信の伝記について山田文昭師は「教信は賀古駅の近在に住む、文字も知らぬ一愚禿であつた。常に念佛申しながら人に傭はれて使ひ走りして生涯を終へたので、念佛丸と世間から愛唱せられた。たまたま勝尾寺の住持で無言の行者の勝如に念佛の縁を結んだことによつて後世に名を知られた人である。其後讃仰のあまり色々彩色せられ、所謂後世者振つた伝記は間違ひである」とのことである。

前記の聖人の語に「心にいく思召して在しましてはんべらんは大きな誤なり」とある。この一句こそ聖人が関東の教團を去られた大きな原因を打ち明けられてゐる感じがする。関東二十年の聖人は、自然に集る道友と辻堂とか太子堂などで談合せられてゐる間に関東の教團が出来た。するとその人達は聖人を教祖として尊崇する餘り、偶像視し、別人扱ひするようになつた、それでは一番大切な凡夫往生の道が塞ぎされて来た。「沙彌教信の定なり、親鸞弟子一人もたず候」と仰られる聖人の居心地の悪い場所、即ち化縁のつきた場所となつた。然るに関東からはるばる尋ねられた念佛者の心底に今なほ残つてゐる障りを「心にいく思召して在しましてはんべらんは大きな誤なり」と払はれたのである。親鸞は愚禿以外の何者でもない、淨土真宗に歸すけれども、眞實の心はあ

御自ら一文不知の愚者、凡夫としての姿を示されると共に関東の念佛者の眼にかかる霞のやうな障りを払ひのけて下されて、愈々凡夫往生の通を表白せられたのがこの金言である。私は先づ「親鸞におきては、よきひとの仰を被りて信するほかに別の子細なきなり」と仰せられる聖人の説き手でなく聞き手、教化者でなく求道者としての御態度にうたれる。関東の念佛者を前に語られてはるが、聖人御自身は釈迦、彌陀、諸佛に隨順された眞佛弟子として終始せられてゐる。

次に一番大切な御言葉「ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」とは、よきひとの仰の極みである。聖人はそれを二十九歳の時、六十九歳の法然聖人から直々に聞きとられ、聖人の生涯を貫ぬいて憶念相續せられた金言である。

法然聖人はまた四十三歳、善導大師の觀經の疏を通じて聞きとられた金言である。

善導大師はまた觀經を通じて、この金言を世尊の仰の極みとして聞きとられた。

釈尊はまた靈鷲山上の大經の會座において、光顔翹々として輝くといふいと満悦の御相において、彌陀成佛の因果を説かれ、「其の名号を聞く」と云ふところに無上大利の存することをあかされてゐる。

釈尊は更に、六万の無量の諸佛の稱讃と護念の中に阿彌陀經を説かれ、そのかなめが「名号執持」の一点にあることを

りがたし、虚仮不実のわが身に於て、清淨の心もさらになし云々と御自身の全煩惱を残さず打ち明けて下さつてゐる。

私共は秋の明月を賞でる、仲天に皎々と澄みわたる月影は人類三千年の歴史を照し續けて、如何に人心を和らけ、清め慰めて来たことか。然しその月光は太陽の光の返照であつて月そのものは何等の光も持たない。その様に御出世以來幾万の人々に無限の感化を與へて下された聖人ではあるが、御自身は飽く迄も愚禿であり聚墨であつて、ひとへに彌陀廻向の御徳の返照である。

我々東洋人は謙遜の徳を尊ぶ。然し一般に言ふ謙遜とは、内心に立派なものと思つてゐながら外にはつまらぬものと言ふ。さう言ふ芥開氣の中で生活してゐると、聖人が愚禿と言はれても、何かそこに奥ゆかしい尊いものが實はおありなのだと言ふ風にしかとれぬ。さうではなくほんたうに愚禿とは正真正銘の凡夫の御姿なのである。「いささかの所勞―病患のこともあれば死なんするやらんと心細く覺ゆる」とも「名残惜しく思へども娑婆の縁つみて、力なくして終る時彼の土へはまいるべきなり」の御言葉も、そこから発せられてゐる。愚痴の女韋提希が彌陀佛の本願力一つを頂いて、眞實の淨土に往生した、そのことを善導大師は独り明らかにして下されたのであるが、親鸞聖人は我が御身に於けて飽く迄も凡夫直入の姿を地に刻して下されたのである。

親鸞におきてはただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよきひとの仰を被りて信するほかに別の子細なきなり

述べられてゐる。執持とは不散不失、ひとすちにたのむことである。

私は恩師から數異抄の二節は淨土の正門であるとよく聞かされた。彌陀佛の御自ら衆生のために選択せられた切々哀々たる悲心のおのづからなる発露の聲が「ただ念佛して」である。世尊を始め奉り、大聖興世の正意を顯はし給ふ三朝淨土の祖師方のひとしく相承せられるところである。

然しここで大切なことは、釈迦彌陀二尊を始め奉り、七祖聖人の御勧めであるから念佛申さねばならぬとなつたのではなく、形式主義、律法主義の念佛である。これといふのも我が身の罪惡深重、煩惱熾盛の姿が知れないからである。「ただ念佛して」と仰られるのは、はてしない生死の海に浮ぶ瀬のない身にもつた罪業の重さに沈みきつて如何とも爲し能はぬ者への大悲の至極である。不治の病にかかつて働くにも働けないで、米塩の資もつきたところに、その窮狀を知り尽した親がはるばるたづねて来て、涙ながらに金を恵んで下さつたらどうであらう。切角親がやらうと言ふのだから貰はねばならぬなどとは餘裕のある人の言ふことである。眞に我身の病重く薬料どころか米塩にこと飲く身にはただ親の親切を涙と共ににおし頂く外はない。それが「信する外に別の子細なきなり」である。

是処に善導・法然の両師によつて玄意を明かにして頂いた觀經に眼を注ぐ。韋提希夫人は直接世尊にお会ひ申して、佛力をもつて淨土を拜み、更に彌陀佛のみひかりに浴して廓然

して大悟した。然し夫人は、佛滅後の衆生の往生の道を述べ給ふやうにと懇願し奉ると、世尊は定善と散善の道を説き給うた。

定善とは定水をこらし心月を觀じて行く道である。然しこの道を修して始めて我身の煩惱の浪の如何にしづめ難きかが知れる。私はさうした修行をしたこともないが、朝夕に僅かの時間、佛前に座しても、その時如何に心が散乱してやまぬかを見てもほほそのことが推定される。

定善の道の閉ぢた者に散善の道がある。散乱の心のままで大乘教を学び、又は小乗の善を習ひ、或は世間一般の善をつとめる道である。然し大小乗の嚴格な善はもとよりのこと、世間の善、孝養父母、奉仕師長などの人間として当然歩まねばならぬ道においても、すこし善らしい行が出来るとすぐそれを誇りとし、他人がそれを認めてくれないと相手をさげすみ、反対に出来ねば出来ぬで卑屈になり、つまらぬつまらぬと愚痴をならべる。所詮絶対の善を願ひながら、相對の善しか出来ぬ身は、やがて惡の方へ惡の方へと転落して、遂に愚人惡人の下品の機こそ我身の姿であると照されて来る。

先づ下品上生者の姿は

「大乘の御經の惡口までは言はないが、種々の惡事を行つて、すこしも慚ぢない様な愚人が、いよいよ臨終となつて幸にも善知識に遇うて、大乘のお經の名を聞かせて頂いて千劫の罪を除かれ、更に手を合せて南無阿彌陀佛と稱へさせて頂くと五十億劫の罪が消える、そして遂に淨土に往生する。」

とに極惡最下の下品下生者の、心に佛德を念ふことさへも苦に逼られて出来ぬ愚人、その者にこそ「ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」との彌陀大悲の至極が注がれてゐる。

法然聖人が聖覺法印に語られた、聖人四十三歳の獲信の時の模様「時に觀經散善義の、一心專念彌陀名号の文に致つて善導の元意を得たり。歡喜の餘に聞く人なかりしかども余が如きの下機の行法は、阿彌陀佛の法藏因位の昔、かねて定めおかるるをやと、高声に唱えて、感悅隨に徹り、落涙千行なりき」とある。下機とは下品の機の謂である。一心專念とはただである。彌陀名号が念佛してである。

親鸞聖人は、「ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰を被りて信するほかに別の子細なきなり」と仰られて、我身は「いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と自照せられてゐる。

無 碍 の 一 道

釈迦佛の永遠の求道魂を象徵される善財童子は、文殊菩薩に遭ひ我身の慚慢さ愚痴さの全煩惱を打ち出して懺悔すると共に、菩薩の道を教へ給へと請ふと文殊菩薩は善財童子求道の底力、背後から照す光となられる、そして五十三の善知識を善財を訪ふ。(承前略述)

次に下品中生者、即ち出家の惡人の姿は

「諸々の戒を破り、僧物を盗み、佛法を食ひものにして平氣である様な罪人は、臨終になると地獄の猛火が一時に其人に攻め寄せて来る。其時、善知識に遇うて、南無阿彌陀佛の名号の広大ないはれを聞かせて頂くと、八十億劫の生死の罪が消えて、地獄の猛火が涼しい風と變つて、天から華をふらす。かくして淨土に往生する」

更に下品下生者、即ち極惡の凡夫の姿は

「この人は五逆十惡、そのほかあらゆる善からぬ業を身にそなへて、必ず地獄におち、永い間無量の苦を受ける筈である。かやうな愚な惡人も、臨終の時に、善知識に遇うて種種に慰められ、名号の功德を聞かされ、その功德を心に念ずることを勧められる。然し刀のやうに鋭い無常の風が身を裂く苦しさにせめられて、念ずることができない。これを知つた知識は『汝もし心に念ずることが出来ないなら、口に無量壽佛を稱へよ』と教へる。この勧めによつて信心をおこし南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と十声念佛申すと、さしも重かつた八十億劫まよふべき生死の罪が消えて、断末魔の苦しい中にも、日輪のやうに輝く金色の蓮華があらはれ、それに乗ぜられて極樂に往生する」

以上が觀經に説かれた極惡、極愚人の往生の相である。願みれば世尊が定善、散善の道を説かれたのは、我等をして極重惡人たることを知らしめようがためであつた。斯る下機の凡夫の真相を佛はかねて知し召されての善巧方便である。こ

道綽禪師が安樂集に觀經の了解を述べて居られるところを親鸞聖人が讃仰せられ「縱令一生造惡の衆生引接のためにとて、称我名字と願じつつ、若不生者とちかひたり」と結ばれてゐる。

又源信僧都の往生要集に觀經を了解してゐられるところを親鸞聖人は讃歎せられて「極惡深重の衆生は他の方便さらになし、ひとへに彌陀を稱してぞ、淨土にむまるとのべたまふ」と結ばれてゐる。

嗚呼、いづれの行も及び難き、地獄一定の者、一生造惡の衆生、極惡深重の衆生、その者をこそ往生せしめずばやまじ成佛せしめずばおかじ、地獄の猛火を化して清涼の風と転ぜしめずばならじと御誓ひ下さる大慈大悲のかたまりが「ただ念佛して」と仰せ下さるのである。

以下次号

福 島 政 雄

善財はこれから色々な善知識に遭ふのでありますが、五十三の善知識をあけることは出来ませんから、そのうち私の心に特別とまるものを申し述べませう。

最初の善知識は、和合山に住む功德雲比丘といふ出家の男子の修行者であります。修行者は和合山の頂に居つて、寂かに山を眺め、雲を眺めて、心を静めて、その辺を歩いて道を修して居るのであります。この山と云ふことについて考へさせられますことは、山と海との比較であります、山と云ふものは静さを現したものである、海といふものも静さを現しますが、一面においては非常な動きを現すものであります。私自身の天地自然に対しての心の移り変りを申せば、青年期は海へ親しみ、海岸が好きで一番親しみを感じてゐましたが、三十から四十と年をとると心持が變つて来まして、今日では海も悪くはないが山に段々親しみを特つて来しました。日本は山が多く、海も美しいけれど、連山の姿、ことに雨を頂いた連山の姿をたまらなく美しく感じます。冬の頃の琵琶湖畔の連山の姿も美しく、東海道線では富士山への愛着を常に感じて居ります。私は富士山の姿へ見ると一種の心の落着きと心の踊躍歓喜を覚えます。このやうに山に段々親しみが出て来しました。親鸞聖人は、海、海と常に云はれた方であります。聖人の著はされた和讃や教行信証や其の他に、功德の大宝海とか、一乗海とか、本願海とか云ふやうに海に非常な親しみを特つてゐられたと思はれます。道元禪師の著書には、山、山といふ言葉が沢山出て居ります。そこに両聖人の間に違ひがあると聞かされたことがあります。私は親鸞聖人の教を聞いて居りますが、海よりも段々山に親しみを感じて参りました。

くれるのであります。その知識の一人に、良医、彌伽も出て参ります。種々な知識も出て来ますが、私共の心を打つものは、童子が進求国と云ふ所に参り方便命婆羅門を訪ねて参ります。婆羅門は佛教から云へば外道であります。それを訪ねて行くと、それが善知識になる、かうしたところから佛教は一切の外道をその中に攝めてゐることがわかります。

この方便命婆羅門の修行してゐるのが大変なことをやつてゐます。見上げる様な刀の山が聳え立つてゐる。その山の下の頂に登つて、その頂から身をおどらして火焰の中に投じて苦行をして居るのであります。その有様を見てさすがに善財童子もギョツとするのであります。そして悪魔が善知識の姿を現してゐるのだからうか、と考へてなめらふのであります。すると空中から声があつて「疑うてはならぬ、これは実に汝の善知識である」と教へるのであります。空中の声と申しますのは、その人の一番深い心の底からひびき出る声、それを譬へたものでありませう、阿闍世王も空中の声として殺害した父、ビンバシヤ王の声を聞いて居ります。これも父の生前のいましめが阿闍世王の生命の底からひびいて来たのだと思ひます。善財は空中の声に励まされて、方便命婆羅門を訪ねると、自分のやつてゐるやうに刀の山に登つて火炎の中に身を投ぜよと勧める。そこで岩石を登つて善財童子は身を火炎に投ずると、その身が火にふれないさきに、非常に安樂なさとりがひらけ、それから火炎の中に行くと、復た菩薩の寂

さて善財童子の求道の始めに、和合山に住む功德雲比丘をたづねる、靜かに山や雲を眺めて修行してゐる善知識を訪ねるといふことは、山といふ落着いた靜かなところから善財の求道が始められるのであります。

山に於いて靜けさの世界を味はされた童子は南の方に参りまして、海門国の海雲比丘を訪ねるのであります。童子は菩薩の道をそこでたづねると、海辺の出家の修行者の海雲比丘は「自分はこの海辺で十二年間、海を相手どつて色々と考へてゐる。そしてこの大海を以て、自分の世界として毎日大きな海を觀察し、冥想を續けてゐるうちに、或時、この大海の真中に美しい蓮華が現れ出て、その蓮華の上に座し給ふ佛と菩薩の姿を自分は明らかに拜したのである」と物語るのであります。この意味は色々ありませうが、海を對象として、海と一味にとけ合ふと云ふところまで修行を續けて行くことでありませう。海とは煩惱の海とも考へられます。十二年とは十二因縁といふものを指して居ると思はれます。即ち煩惱の大海を自分の世界として、この煩惱の海に十二因縁を觀じて居るのであります、これが第二の善知識であります。

善財童子は更に次から次へと善知識を求めて、文殊菩薩の教通りに、菩薩道の徹底といふことを問ふのであります。善知識は、自分が味うてゐる一つを述べるだけで、これ以外は何も知らぬかと答へて、次から次へと善知識を紹介して

かですすらかな照明三昧を得ると御経に書いてあります。

そこで岩山とは何であらうか、火炎とは何であらうかと考へさせられます。ダンテの神曲は有名なもので私も所々を抜き読みしてゐますが、地獄と淨罪界と天国の三篇になつてゐます。そのうち地獄界は永遠の絶望の世界を写し出してゐます。それから淨罪界では罪が洗ひ去られて天国に入ることゝ述べてゐますが、この時、罪が炎で洗ひ淨められるとなつてゐます。ダンテ自身も神曲では類にAの焼印をされてゐます。Aは邪淫の罪の焼印であります。ダンテ自身も淨罪界では焰の中に身を投ずるのであります。するとAの刻印が消え去るのであります。ダンテは斯様に火は焼き尽して總てを淨めるものとして扱つて居ります。

方便命婆羅門は火の中に身を投ずる、この火は煩惱を現す火であります。刀のやうにそば立つ山とは、それは銘々が生におきまして持つてゐる理想であります。自分が駄目であればある程、理想を美しく描くものであります。自分が或る煩惱に陥る場合には、その煩惱と正反對な美しい理想を描いてゐます。だから自分としては煩惱に没してゐると思はないで、自分はこんな立派な理想を持つてゐると考へて居ります。私共の三毒の煩惱が強いほど高い理想を唇氣楼のやうに描いてゐるものであります。そこは登らうとして登れない所でありまして、刀の山はこうした山であります。自分は登つてゐる積りでありますけれど狐にだまされた様な状態であります、伝説では狐にだまされると奇麗な風呂に入つた積りで、

実は肥壺であつたといふことを聞きますが、丁度其の様に、自分は高い山に登つてゐる積りで独りで喜んでゐるが、実はそれは煩惱の肥壺であつた、つまり自分が独りよがりな高い所に登つてゐるにすぎぬといふことになるのであります。

方便命婆羅門はかうしたことを教へるものではなからうか華嚴経は渺々とした広い教でありますが、さういふことをここでは教へられるのであります。

それから段々と知識を訪ねまして、善財童子は一人の少年を訪ねて参ります。その少年は釈天王童子と云ひ、河原で砂を弄んで戯れて居るのであります。それが善知識であります。これは一般に解り易いやうであります。実際に幼児を善知識と思ふことは度々あります。私共は年と共に不純になつて参ります。無心に砂遊びをやつてゐる小供を見ると、自分もこの純真さがあつたとかへり見て、現在の自分の不純さを今更知らしめられます。幼稚園などで無心に遊んでゐる園児を見ると涙が出さうになります。自分はすれつからしになつて、純真さを失つて了つてゐる涙であります。かうしたことはよく経験することでありま。

それから善財童子は、海住国の自在ウバリといふ在家の一人の婦人の修行者を訪ねて参るのであります。この婦人は立派な獅子の座についてゐて、善財が例のやうに訪ねると、この婦人は、身体から何ともいへぬよい香りを出すのであります。

であつた、奥様が観音様のやうであつたとはよく聞くことでありやう。善財童子はさう云ふ感じを持つ婦人を善知識として拜んでゐます。

また次から次へと善知識を訪ねる善財童子が満幢城と云ふお城で、満足王を善知識として訪ねるのであります。この王を訪ねて参り段々と宮殿の中に入つて参りまして、ヒョッと善財は宮殿の庭を見るのであります。そこには何とも言へない憐憫たる光景が現れて居るのであります。そこには沢山の罪人が繋がれて居つて、或者は手足を断たれ、或者は耳や鼻を截られ。或は両方の眼をえぐられ、或は首を斬られ、或は息のある儘に油を灌いで火を付けられると云ふ風な残酷な光景が現れて居る。

これには善財童子も非常に驚いてためらふのであります。その時天上から声があつて励まされ「汝の善知識である」と教へられるのであります。そこで満足王の許に行つて身を屈して菩薩の行を尋ねるのであります。すると王は、善財を奥の宮殿に導いて行きますと、そこには広大なこと極りなく、七宝の垣で飾られ、金銀財宝で莊嚴された講堂がある、王はそこで善財に教へますのは、自分がかう云ふ風に憐憫たる光景を表に現してゐるのは、十惡の衆生を正しい道に導くためであつて、これは幻の姿を見せてゐるのである、奥の世界が自分の本当の姿で金銀財宝で飾られた、即ち色々の徳を積み重ねてゐるのである、と。

す。私が学生時代に心理学の講義で聞いたのでありますが、香りに二種ある、西洋の香水などは私共の心を刺激して、むしろいらだたせる効果があり、東洋の香が薫ると寂かに静まつて来る。同じ香といつても心を挑発する香と、しづめる香と分れてゐると未だに聞き覚えて居ります。さて自在ウバイが身に常に妙香を出すことありまして、その香は香水を振り撒いたのではなく、沈香とか、末香といふよい香をたく時の薫りでありませう。これは男子として勝手なことを申しませんが私などは愛欲の煩惱によく迷ふ者であります。或種の婦人はしづめられるが、或種の婦人はたきつけられる、種類の変わった二様の型があるやうに思ひます。それはお前が駄目なからだ、そんなことではいけないと云はれるかも知れませんが現実にはさうなつてゐます。

身に常に妙香を出して、身の周りの者の心をしづめる、心の香が現れて其人に遭ふと自然に落ち着くのであります。今はずでに世にないお方ですから申しませう。近角常観先生の奥様にお遭ひすると観音様の感じをうけました。私共の煩惱を自然に静められるのであります。求道学舎で四十人程厄介になつてゐましたが、その中の一人に浅野君といふのが居りましたが、学舎に入つてゐると先生の缺點がよく見える、先生はせつちで、必ずしも先生には敬服してゐないが、奥様には敬服してゐる、男姓だから女姓に感じるといふのではなく、先生の奥様が観音様と云ふ感じであつたと申してゐます。東京で懇意な人々の口から、常観先生は家庭生活で実に幸福

六十華嚴ではさうなつてゐますが、四十華嚴では、ここがもつと詳しく述べられてゐます。王の名も甘露火王と名告つてあります。然もこの王の国を理想の国として写し出されて居ります。甘露とは慈悲であり、火とは智慧であります。慈悲と智慧で国を治めてゐる王であります。甘露火王の王家は所謂、萬世一系で、次から次へと嫡嗣が王位を承継いで来た尊い家系になつて居ります。国はよく堅められて、立派な軍隊もあり、王は徳をもつて政治を執り、外国との交際もよく調ひ、他国が正しい道を踏まない時には、軍隊を派遣してこれを伏せしめて国の護りを強くし、王と人民とは一体となつてゐて、王は人民を国の本と考へてゐて、王も人民も一体一如になつてゐる、斯の様に説かれて居ります。

この事を始めて知りましたのは私が長く育てられた臼杵祖山先生から最初に直接お話を承りました。先生は昭和九年の明治節の日「三聖を仰ぎ奉りて」と云ふ題でこのことを教へられました。三聖とは、釈尊、神武天皇、聖德太子を挙げられ釈尊は甘露火王の国を佛教における理想の国として説かれてゐるが、印度や中国ではそれが見られず、独り日本において神武天皇が肇国せられ、聖德太子が大乗佛教の精神で国を治められたといふことによつて、甘露火王の国と同じ国となつて来た。血統は絶えず、皇祖皇宗の御靈を祭り、上下一身、君臣同體の大精神を以つて国を治め、大臣大將があつてよく国事を扶けてゐて、釈尊の大理想が日本において現れてゐる。当時から云ふ風なお話を臼杵先生から承つて非常に感

激いたしました。それから四十華嚴を読んで見ますと、甘露火王の理想の国が出て居りまして、「王は民を以て国の本となす」といふ様なところは日本の姿そのままでありまして、日本の国のことを釈尊が予感されて述べられたのかと思ふ程であります。その理想の国は軍隊のない国ではなく、立派な軍隊があるのであります。最近再軍備云々の問題が色々議論されてゐますが、その軍備はもとより侵略主義のためであつてはなりません。この四十華嚴に説かれてゐる佛教の理想の国が始めて日本に再現すると云ふことを目ざして居てよからうかと思ひます。私はそれかと云つて再軍備論者ではあ

りませんが、近角先生がかつて、戦争はよくないことであるが、人類の業として戦争しなければならぬ時がある、その時単なる平和主義では駄目であるし、単なる戦争主義でも間違ひである。事実として戦争しなければならぬ時がある、その戦争は飽も迄攝受のための折伏でなければならぬと言はれたことがある。日本の現状にあつて、再軍備はいけない、平和主義でなければならぬといつてゐますが、これがたして実際にやれますでせうか。私ば戦争主義でもなく、平和主義者でもありませんが、甘露火王のやうな国を再現したいものだと願つて居ります。

以下 次号

自分の正体を見る

中野 駿太郎

悪 い ま ん ま
自分はいま現に生きてゐる。生きてゐるからには心がある目には見えない心がある。それでその心を見る。そこにある心はどういふ心か。結局、名利愛欲のかたまりである。それ以外にはない。ところが親鸞聖人は『教行信証』の信の巻に「誠に知んぬ。悲しきかな愚禿鶯、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかずにいることをよろこばず真証の証に近づくことをたのしみます、はつべし、いたむべし」

と、歎いてゐられる。しかしここに注意しなければならぬことは、それは名利愛欲のかたまり、言いかへれば煩惱のかたまりであることを、肯定されたのではない。そのままでよいと許されたのではない。しかしまた否定されたのでもない。さうであつてはいけな言はれたのでもない。それではそこがどういふことになつてゐるのか。
煩惱を肯定して、それで安心のできるものではない。それで安心ができるのなら、宗教に来る必要はない。世間の人は多く宗教に來ない。それは煩惱を肯定してゐるからである。

肯定しないまでも、それは仕方がないではないかといふところで安住してゐる。しかし肯定して安心ができないなら否定しきれるかといふに、否定しても、現にやまないといふ現実はこちらをどうすることもできない。否定して、煩惱をなくしてしまへばこれほど安心なことはないのであるが、煩惱がなくなつたら佛陀である。だが凡夫であるかぎり、いま現に佛陀にはなれない。

このとき自分といふものを離れることになる。我慢な凡夫が、自分を地獄一定であると、そこまで落して、それでたじろがぬといふことのあるべき筈はない。これはまつたく『歎異抄』の第十六章に「彌陀の智慧をたまはりて」とある、彌陀の智慧をたまはつた結果、さういふ智慧が出たわけであるその智慧が、凡夫の我慢の心をうち消してしまつたのであるこれが他力であり、佛力である。

煩惱があつてもよいでは安心ができます。さうかといつて煩惱をなくしきれることもできない。ここが抜き差ししないならない苦しみである。しかるに佛陀は、煩惱をなくしきれることのできないといふことを見て下されたのである。それでそこを知らせて頂いたとき、煩惱を、名利愛欲の心をなくしきれることのできない、自分の浅ましい姿を見てもらふのである。そしてその自分の浅ましい姿を見てもらつたところからして、この「はつべし、いたむべし」といふ、懺悔の心がでてきたのである。

もちろんそれは、得意の心ではない。頭を下けきつた心である。頭は下けきつたが、そこにはもはや煩悶はない。もたえはない。自分の正体をよくわからせて頂いて、それをどうしようといふことはなく、或る意味においてそれは、悪いいまんまである。『歎異抄』の第二章である「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかそかし」に徹底することである。そこにもうあがきはしない。

人間のあり方

いかにも名利愛欲から離れ得ぬわが身である。そこからあらゆる苦しみが起つて来る。しかるに佛陀は、その離れ得ぬところを見て下されたのである。ここに氣づかせて頂いたとき、佛陀の方に引きとられて、自分の浅ましい姿を見せて頂く。そしてその度は、その浅ましいわが身を、佛陀のお慈悲に莊嚴せられて参ることになる。そしてそこから、新しい生活がひらけてくることになるのである。

だが凡夫であるから、なか／＼この信仰の軌道のみを進ん

でゆくことはできない。またいつしか迷ひの心に戻つてしまふ。このとき自分の浅ましい姿は見へなくなつてしまふ。浅ましい姿と現在の自分の心と一つになつてしまふ。

かうなつたときには、自分を離れて、自分の眞の姿は雲散霧消してしまふ。そしてこんなことではいけないとあせる。しかし如何にあせつても、どうにも仕て見ようがない。この時は、悪くはないといふ心で一ぱいである。ところがこの悪くはないといふ心は、我慢の心である。増上慢の心である。わが身知らずの骨張である。ぜんたいが如何にもがいても、善くならない我が身であつたのではないか。

信 後の 修養

ひとたび思ひをここに致すとき、今までののほせが一時にさがるのである。そして再び、わが身の浅ましい姿、醜い姿が、はつきりと見られることになる。如何にも善くなれないわが身であつた。そこを見て下されたのであるか有難いと、ここに懺悔と感謝との信仰生活の軌道に、戻らせてもらふことになる。ここを『歎異抄』の第十六章に「すべてよろずのことにつけて、往生は、かしこきおもひを具せずして、ただほれほれと、彌陀の御恩の深重なること、つねにおもひたしまいらすべし」と注意してある。この思ひ出すといふことが肝腎である。これは忘れたからこそ、思ひ出すといふことの必要が生じてくるのである。

悪くはないといふ心は、善くしようと思へば善くなるのだといふ錯覚が、そこにあるからである。この錯覚が

迷ひである。我慢である。この錯覚から脱し、迷ひからさめたとき、自分の正体を見ることが出来る。すべての悩み、あやまりは、自分の正体を見失つたところからくる。

いま挙げた『歎異抄』の第十六章のあの文章のつづきに「しかれば念佛ももうされさふらふ、これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまうすなり。これすなはち他力にたまします」とある。この自分の正体が見えたとき、自然に念佛が申される。これはまったく自分のほからひではない。一切他力である。この自分のほからひではどうにもならぬところ求道者の常に血の涙をながすところであるが、それ故ここにある「つねにあもひたしまいらすべし」とあるこの思ひ出すのも、自分のほからひで思ひ出せるのではないので、従つてここが信前においても信後においても、もつともむずかしい、また微妙なところである。

これを信後の修養といふが、すでに修養といふと、わがはからひのやうにとれる。しかしわがはからひではどうにもならぬのであるが、ここに「つねに」とある、この「つねに」他力に親しむといふが、さういふ心のあり方に、或る意味で苦心をすることが必要である。『末灯鈔』の中に「他力のなかにまた他力とまうすことは、うけたまはり候はず」とあるこれは我々の意味における修養、工夫の必要を説かれたものではなからうか。近角常観先生著『信仰之餘瀝』の「一五 信念の修養は實際問題に如くは無し」は、この間の消息を物語られしものと思はしてもらふのである。

良書照会 — 近角常観先生著 —

「人生と信仰」に就て

先生の御著書が京都の丁子屋書店から再版されました。引き続き他の四部まで出版されます由で、私共といたしましては非常な欲びであります。

先生は昭和十六年十二月二日太平洋戦争の寸前にお亡くなりになり、すでに満十年を過ぎました。特に敗戦以来先生の御著書が再版され、世の灯となつて下さることを私共は切望して居りました。近角常観先生もそのことを非常に御心にかけて下さつて種々に御腐心なさつてゐられましたことは私共のよく拜察申して居たところであります。

幸に第一版といたしまして「人生と信仰」が世に出されました。謹んで皆様におすすめ申し上げます。

第一章に人生問題と信仰
第二章に悲観思想と信仰
第三章に倫理力行と信仰
第四章に犯罪心理と信仰
第五章に社会問題と信仰
第六章に国家秩序と信仰
第七章に世界宇宙と信仰
となつて居ります。先生の序文にも「現代思想界の乱調は律法的教訓、もしくは物質的施設を以て根治すること難かる

べし、ひとり信仰により根本的に自覚して、初めて解脱せる眞人生に入ることを得ん。これ本書のある所以なり」と示されてあります。

今や人心の眞に歸すべきよるべを見失つてゐる時にこの書が公にされて私共の手に入り得ることになりましたことは、闇夜に光明を得たよろこびであります。

「盲の亀が浮木に遭ふ」といふことを佛教ではよく申しまゐる。はてしなく広い海にきほなくさすらうて行く盲の亀には、何処にやすらうべき浮木があるかを見分ける力がありません。そこに先覚者の御手引、おそだてによつて浮木にあふほかに道がありません。然し私共は我慢の強い人間で、頭を下け、己を空しくして教をうけることが仲々むづかしく、俺が、俺が何処までも統けて參るのであります。佛はかねて、さうして頑張つてゐるまんまの私共を盲と見てとつて下されて、無限の憐れみを注いで下さるのであります。よきひととは、この佛陀無限の大悲のひらめきとなつて私に向つて下さる方でありまゐる。

本書をよきしるべとさせてい頂て、一人一人が、浮木に盲亀があふよろこびを得させて頂きませう。

發行所、京都市下京区油小路南入ル。 丁子屋書店。
定価一八〇圓、送料一六圓。振替口座、京都一四五〇番。

花田記

編集後記

三伏の夏が参りました夏中御見舞申し上げます。

さて本年十月中旬に世界佛教徒大会が東京名古屋・関西と三箇所で開催される、名古屋ではその準備に大重である。然し日本佛教の何処を世界佛教徒に照会してよいのであろうか。

佛教哲学の研究は確かに日本は世界無比である、それは国内に佛教徒が多く、同文の中国の佛教研究の遺産を承け継いで来たことがあつて大きな力となつてゐる。日本の主要大学の六箇所に印度哲学は講ぜられてゐる。又各宗の寺院が日本の到るところに高い屋根と鐘樓を見せてゐる、そして国内の八割以上が寺院の檀家で、其信仰の程度は濃淡の差はあるが、更に角、国内の生活に風俗化してゐる。そして無意識的に日本人の生命の中に佛教が滲み込んでゐることは事実である。深い縁の糸はすでに先輩知識の勞苦によつて結ばれてゐるが、この縁が將來如何に芽萌えて行くのであらうか。佛教の高遠にして幽玄なことは日本人の誰もが認めることであるが、我々がこれをどう頂くかといふことが一番大切なことである。それに現に地に咲く花として、篤信者の持つ体験と思想を世界佛教徒に照会することも大切なことと思ふ。唯表面だけのお祭り騒ぎで終らぬやうに願うてやまぬ。

○「無碍の一道」はいよいよ善財童子が文珠

菩薩の知恵に照らされつつ、五十三の知識を歴訪する所を福島先生が述べて下さいました。

和合山の功德雲比丘から山の静けさを教へられ、海門国の海雲比丘に煩惱海上に浮ばれる衆上濟度の御佛を教へられ、進求国の方便命ベラムンから煩惱と理想の実相を学び、或は河原に砂遊びする少年に純真さを教へられ海住国の在家の婦人の修行者、自在ウバリから妙香を学び、更に満幢城に満足を訪ね理想国家を見聞するところまで記載させて頂きました。善財求道物語は雄大にして豪壯、実に世界無比の求道物語であると知らされます。○「自己の正体を見る」の原稿は久方振に東京都千歳局区内世田谷四ノ五九〇番地、中野駿太郎先生から頂きました。如來本願の妙用に我等の煩惱の全体が転化されて行く、そこ一つに信の旅のあることを明かにして下さつてゐます。信後の修養といふ点は近角先生も御力説下さいました。二十九歳にして信眼のひらかれた祖聖が京洛六十年間の師につかれての開法隨喜の生活から、独り北陸の雪深い地に流適の身となられ、そこでの五年間の孤独の御生活こそ、嘗ての師教が慈々祖聖の身について來た貴重な信後修養の五年であつたと感佩しておきます。

○「親鸞におきてはただ念佛して」は、數異抄二章の私の頂戴録であります。私共が明月を仰ぐ時、そのひかりの照しさに幻惑せられて月の正体を見失ひ勝てますが、聖人は飽逆、夫自身に光のない月の正体、即ち愚禿の姿を御身に掛けて御示し下されて、ひとくに「ただ念佛して」の大悲を仰いで下さるこ

とは私の往生をそのまま決定して下さる大きな燈炬であります。

◎ 福島先生の御住所は 横須賀市船越三ノ三七であります。

昭和二十七年六月十日 印刷
昭和二十七年六月十五日 発行
毎月一回十五日発行

定価 一年金二百四十圓(郵税共)
半年金拾七圓(郵税共)
部金拾七圓(郵税共)

名古屋市南区駈上町二ノ二八

編集兼 花田正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田政雄

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八

一道会館

發行所 慈光社

振替口座番号 名古屋一〇四七〇番